

令和七年度入学試験問題

国 語 (人文学部・教育学部・経済科学部・医学部・創生学部)

注 意 事 項

- 一 この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはならない。
- 二 問題冊子は、全部で二十三ページある。(冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつた場合は申し出ること。)問題冊子の中に下書き用紙が一枚入っている。
- 三 受験する学部によって選択する問題が異なるので、左の表を見て、○印で指定された問題を解答すること。なお、問題ごとに学部の別が記してある。

問題(ページ)	学 部	人文学部	教育学部	経済科学部	医学部	創生学部
第一問(一～八ページ)		○		○	○	○
第二問(九～十二ページ)		○	○			
第三問(十三～十六ページ)		○	○			
第四問(十七～二十三ページ)				○	○	○

- 四 解答用紙は、問題冊子とは別になっている。人文学部・教育学部は三枚、経済科学部・医学部・創生学部は二枚である。
解答は、すべて解答用紙の指定された箇所に記入すること。
- 五 受験番号は、各解答用紙の指定された二箇所に必ず記入すること。
- 六 解答時間は、九十分である。
- 七 問題冊子及び下書き用紙は、持ち帰ること。

第一問 次の文章Ⅰと文章Ⅱは、ともに『真贋のはざま』という本の一部である。文章Ⅱを参照しながら、文章Ⅰに関する後の問いに答えよ。なお、文章Ⅰは『真贋のはざま』全体のまとめであり、贋作^{がんさく}について述べられている文章Ⅱよりも後の部分にある。

文章Ⅰ

「ホンモノ」か「ニセモノ」か、いつどこでだれがどのように「つくった」ものか。美術品の真贋^{しんがん}や文化財の出自をめぐる論争は、古今東西を問わず、人々の関心をカンキ^①し続けてきた。そのことは、多くの文献や史料の物語る通りである。もともと、わが邦において、モノを「つくった」と書いているうちは穏やかであるが、「造った」とか「作った」と記し始めると、それだけで微妙なニュアンスが生じてくる。ならば、「創った」とでもすればよいのであろうか。「創造」という観念を呼び覚ますようなオリジナルティや、創意工夫のコンセキ^②を匂わせる感覚がそこに醸し出されてくるからである。しかし、天然自然なものを除く、人為的なもののなかに、真の意味で「創った」と形容できるものがどれほどあろうか。

そのことを実証してみせたのが、一九九三年春にルーヴル美術館で開かれた展覧会『模写する、創造する』であった。その大規模企画展は、ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー、ジャン・オーギュスト・ドミニック・アングル、アンリ・マティス、エデュアル・ヴュイヤール、ポール・セザンヌ、アルベルト・ジャコメッティら、昔日の巨匠たちが、ルーヴルのニコラ・プッサン、「ヴェネツィア派」、「フィレンツェ派」の模写や臨写に精を出していたこと、エドガー・ドガ、ウジェーヌ・ドラクロワがやはりルーヴルの作品の模倣に励んでいたこと、マティス、アンドレ・ドラン、パブロ・ピカソ、サルバドール・ダリら、二十世紀の美術家たちが古画からレイカン^③を得て作品を制作していたこと、さらにマルセル・デュシャン、ルネ・マグリット、アンディ・ウォーホル、ロバート・ラウシェンバークらが《モナ・リザ》の再解釈でいかなる作品を展開してきたのか、要するに、美術の世界における「コピー」行為がいかに独創的な創造をツムギ^④出してきたのか、それを三百点超の作品によって示そう

としたものであった。

いまでこそ、われわれは「オリジナル」な創造に対し、特別の価値を付与するようになってゐる。しかし、人類の長い歴史を振り返つてみると、ことモノ造りに関して、獨創性が賞賛されるようになったのは、そう昔のことでないことがわかる。獨創的な生産とは、他者の造つたモノとまったく違つてゐるということである。

そのことが特別視され、そこに積極的な意味を認めるようになったのは、生産物を受け取る側が一部の特権階級でなくなり、不特定多数の公衆に移行してからのことであつた。そうなる以前は、特定の注文主（パトロン）が自らの趣味に（かな）適う生産者を選んで生産をおこなわせていた。そのため、生産者の側も「他人と違ふ」ことより、注文主の意向に（アイティスト）適うやり方を取ることに心を砕いた。ことさら獨創性を極めようとする傾きなどなかつたのである。

事実、近世以前にあつての、絵画や彫刻の工房における制作の実態を想起してみるがよい。弟子たちは親方のリユウギ（注5）に倣うことを当然のことと考えており、それ以外のボウト（注6）を選択することなど考えもしなかつた。否、ギリシャ正教会における聖画像（イコン）の場合がそうであつたように、^B明確に規定された仕様（のつと）に則り、先例と寸分違（たが）ひぬものを複製することこそ、画像制作の正統的なあり方と受け止められていた。

「オリジナル」である。そのことの価値が認められるようになったのは、近代社会が成立してから後のことである。言葉を換えるなら、不特定多数の公衆が芸術の需要層を形成するようになってからのことであつた。これは獨創性の探求に苦悩する、ロマン派好みの芸術家神話が成立する時期とも重なる。十九世紀の審美家や愛好家は、そうした神話の萌芽（ほうが）をレオナルドやミケランジェロら、盛期ルネサンスの天才にまつわる伝承や業績に求めようとした。芸術の女神ムーサイ（注1）に選ばれた天才たちですら、自らの個性に裏打ちされた獨創的な表現を実現するのに、あれほど苦悩し、呻吟（しんげん）したではないか。然るがゆえに、獨創性には価値がある、という論である。

芸術品は「オリジナル」でなくてはならない。こう考える人は、いやしくも芸術品とされるものには、創意や工夫、あるいは獨創性といったものが認められねばならぬとする、近代的な芸術観に縛られている。その自覚にトボ（注7）しいばかりか、そうした芸術

観が形成される以前の芸術的な営みにも、あるいはそれ以降の大方のモノ造りにも、模倣や模写や複製が当たり前の姿勢であったという、基本的な認識が欠けていると言わねばならない。

対する、「コピー」はどうか。「オリジナル」でないものすなわち、なにかを基に複製されたものを、「オリジナル」より劣るとみなす考え方は、たしかに広く受け容れられているが、あんがい不確かなものでしかない。模造や複製や模写を「オリジナル」の対極にあるものとする二元論的な図式そのものが、事柄を単純化した、およそ根拠稀薄な議論だからである。

そもそもが複製物でしかあり得ぬ版画や写真や鋳造品にあつて、真に「オリジナル」なものとはいったいなにか、ただちに答えられる人がどれほどいようか。文化庁が明治初期の写真帖を文化財指定しようとしたとき、指定の対象とすべきは、帖面に貼り込まれた鶏卵紙プリントなのか、ガラス乾板なのか、真剣に議論されたという。鋳造彫刻の場合はどうか。彫刻本体はともかくとして、鋳造に使われた雌型の価値は、彫刻本体に較べて劣るというのであろうか。さらに言うなら、絵師、彫師、刷師ら、複数の職人たちの介在があつてはじめて成立する浮世絵版画の場合、いったいどこにその「作家性」を定位させたらよいのか。似たような事例はマイキヨにいとまがなく、議論は尽きることがない。

結局のところ、こうした議論から導き出せるのは、「オリジナル」という概念が、実のところ、かなり曖昧なものでしかないということである。正視せねばならぬのは、ヴィンテージ・プリント、オリジナル・プリント、エディション・ナンバーなど、便宜的な操作概念を用いて、美術品の価格体系を維持しようとする商業主義的な思惑が介在しているということであり、その力が「オリジナル」信仰を支えているということなのである。

美術品の真贋の話で、どうしても忘れられぬのが、文芸評論家として知られる、あの小林秀雄にまつわる、ひとつのエピソードである。出入りの道具屋が持ち込んだ古い焼き物を、イケナイ品物と見た小林は、やにわにそれを掴み取り、庭の縁石に叩きつけ、砕いてしまったという。事の真偽はともかく、この逸話が伝えようとしているのは、「批評の神様」たる者は、真贋をすぐに見抜く直観的な眼力と、「ニセモノ」特有の胡散莫さをそのままにしておけぬ、審美家としてのケツペキさ、その両者を備え持つ人間でなくてはならぬということなのである。

わたし自身も二十代の頃には、批評家たるもの、「ニセモノ」と「ホンモノ」を、小林の言うように、とはすなわち、竹を割ったように、はつきり断言し切る厳しい批評眼を身につけねばならぬと考え、その剛直な姿勢に倣おうと努めたものであった。しかし、いまにして思うが、「ニセモノ」と「ホンモノ」は、峻別可能なのか、あるいは「ニセモノ」には、小林が忌み嫌うような胡散臭さがついてまわるものなのか。

ほんとうにそうなのか。いや、そうではないのではないか、という疑念が、東京大学総合研究博物館で開催した『真贋のはざま』展の、企画の端緒であった。ひとくちに真贋と言うが、「ニセモノ」と「ホンモノ」は相対するものでなく、むしろ圧倒的に多くのモノが、両極の「はざま」に位置している。たしかに、共時的な視点に立つてモノの素性を論じる場合には、「オリジナル」とそうでないものの峻別は可能かもしれない。しかし、そこにひとたび時の流れという概念を持ち込むと、「オリジナル」と「コピー」の境目はたちまちにして曇り始め、不明瞭なものになってくる。しばしば言われることであるが、ニセモノ造りは古代エジプトからすでに存在した。四千年後のわれわれは、古代エジプトの贋造力^⑩へいを単なる「ニセモノ」として退けることができるのかどうか。古代ギリシャの彫刻を模刻した古代ローマの彫刻を、贋物の範疇^{はんちゆう}に入れねばならぬとしたら、ローマの遺産の多くは面目を失うことになりかねない。

「コピー」は所詮「コピー」にすぎぬと断言する前に、「コピー」も時を経るうちに、それが造られた時代の人間の営みの証拠物として、歴史的な価値を持ち始めると考えてみたらどうか。さらに言うなら、「オリジナル」とされるものも、それに先行する時代の遺産の上に成り立っていたわけであり、ほんとうに独創的なものであったのかどうか、これは容易に断じがたいという現実、もっと意識的であつてもよいのではないか。

無から有は生じない。もしこの格率が正しいとするなら、すべての創造は「コピー」の所産である、と断言してもよいのかもしれない。ただし、「コピー」する過程に生じるズレ、エラー、ノイズ、そうしたものが新しいモノの誕生につながる、ということもまた附言しておかねばならない。もし、弟子が親方と瓜二つのものしか生み出せなかったなら、同じことの繰り返しに終始するだけで、新しい様式など生まれようもなかったろうし、結果として、新しい文明の誕生などあり得なかったに違いないのだから。

(注)

- 1 ムーサイ——ギリシャ神話に登場する、学問・文芸・音楽などを司る女神(複数形)。
- 2 鶏卵紙プリント——イメージが定着した紙。一般に写真といわれるもの、そのもののこと。
- 3 ガラス乾板——写真を撮影する時、写像を定着させる板。これを通して鶏卵紙に光をあてることで写真が印刷される。
- 4 ヴィンテージ・プリント——作家が製作・印刷に関わっているため、作家の製作意図が反映された作品と見做される写真。
- 5 オリジナル・プリント——作家(写真家)が撮影後すぐに自分の作品として印刷した写真。多く作家のサインが入っている。
- 6 エディション・ナンバー——限定部数の総数と製作番号を分数で表した記号。版画に倣って写真にも書かれるようになった。多く作家のサインを伴う。

文章Ⅱ

「贋作」^aの捏造^{ねつぞう}には、模倣の技術だけでなく、専門的な知識が要求される。中国の官窯^{かんよう}で焼かれた磁器については、土質や燃焼温度など、精細なデータが科学分析から得られるようになった。贋作者はそうした資料を手許^{てもと}に置き、データに基づいて模倣^{コピイ}を試みる。同じ場所の陶土を使って、同じ温度で焼き上げられると、真贋判定は難しくなる。もつとも、学術的なペーパーなどの報告を踏まえるのはよいとしても、再現にあたって定量的な数字に頼りすぎるのもよくない。正確すぎると、かえって疑われることになるからである。まったくのところ、事は簡単でない。

そこで、新規出土品なのか、伝来品なのか、といった由緒来歴が問われることになる。高度な贋作者は、模倣しようとする画家の様式や絵柄について研究を重ね、いくつかの作品から特徴的なモチーフを寄せ集めるようにして、全体を組み立てる。い

かにも中国骨董らしい、「それらしき」を醸し出してみせることが大切なのである。そればかりではない。件のモノに相応しい「来歴のストーリー」まで作文しなくてはならぬのである。

もし仮に、そうしたものが存在するとしての話であるが、極めつけの「贋作」は「真作」にほかならない、というパラドクスがある。あのフィンセント・ファン・ゴッホも、生前にはからつきし作品が売れなかった。そのため、贋作者の標的になることもなかった。しかし、没後、評価が上がるにつれ、「贋作」が出現し始めた。画風が真似しやすいということなのであろうか、ゴッホの「贋作」は数も半端でない。専門家の手で「贋作」目録が編まれたほどなのである。

「ゴッホの作品」と言えば、普通は「真作」を指す。しかし、これが曲者である。「真作」とされるモノにもいろいろあつて、それらは決してひと色でない。およそ疑いらしい疑いの差し挟まれたことのない「ゴッホの作品」は、当然ながら、それがほかのどれかの手になるものであつても、やはりゴッホの「真作」として扱われる。逆に、ゴッホ自らが描いた作品であつても、なんらかの理由で、その真正性に疑問が差し挟まれると、すぐに疑問符が付される。美術館ではコレクションの目玉とされていたものが、その日を境に、ただの参考資料と化して、収蔵庫の奥で眠らされることになる。

真の「真作」と偽の「真作」、真の「贋作」と偽の「贋作」の組み合わせのなかで、一度こうした振れが生じると、それを解きほぐすのは容易でない。専門家の所説は各人各様で、真実とされるものも、決してひと通りでないからである。ある巨匠は、他人によつて描かれた「自分の作品」を見せられ、その出来の良さに感服して思わずサインを付したというし、また別の老大家は眼の前に差し出された自らの拙い若拙き作品について、それが自分の仕事であることを、最後まで認めようとしなかったという。

(文章Ⅰ・Ⅱともに、西野嘉章『真贋のはざま オリジナルとコピー』による)

問一 傍線部①～⑩のカタカナを漢字に改めよ。

問二 文章Ⅰの傍線部A「造った」とか「作った」と記し始めると、それだけで微妙なニュアンスが生じてくる」とあるが、「微妙なニュアンス」とはどのようなものか。文章Ⅱの二重傍線部a「捏造」やb「作文」という語の用法を参考にしながら、「というニュアンス」につながるように二十字以内で説明せよ。

問三 文章Ⅰの傍線部B「明確に規定された仕様に則り、先例と寸分違わぬものを複製することこそ、画像制作の正統的なあり方と受け止められていた」とあるが、「正統的なあり方」は近代社会成立後、なぜ正統性を失ったのか。文章Ⅰに即して百字以内で説明せよ。

問四 文章Ⅰの傍線部C「二セモノ」と「ホンモノ」は、峻別可能なのか」とあるが、このような疑問を筆者が抱いたのはなぜか。文章Ⅱの内容に基づき百字以内で説明せよ。

問五 文章Ⅰの傍線部D「コピー」する過程に生じるズレ、エラー、ノイズ、そうしたものが新しいモノの誕生につながる」とあるが、筆者はこのような視点から近代的な芸術観をどのように批判しているのか。「コピー」「オリジナル」「独創性」という三語を用いながら、文章Ⅰに即して百二十字以内で説明せよ。

第二問は次ページ

第二問 次の文章は、早くに父を亡くし、今また母に先立たれた姫君が、生まれ育った三条の邸を離れ、叔父である左大臣とその

北の方の住む邸に身を寄せている場面である。彼女はある男君の子を身ごもっていた。後の問いに答えよ。

はかなく秋にもなりぬれば、姫君は、御身隠れなきほどに見え給へば、宰相の乳母、少将などは、心苦しく見聞こえて、「さこそ思し育み給ふとも、大殿なども洩れ聞き給ひては、つひに思しめしうとまれ給はんずらん」と、心のひまなく嘆きゐたり。

A この御ことは霜月に当たらせ給ひたり。「この月は御帯などせさせ給ふべきを」などと、娘と二人、その細工しけり。東宮よ

りは、御心もとながらせ給ふを、「秋のころ、参らせん」と申し給へるに、かくもの思ひうち添へて、心地もなやましければ、起きも上がり給はず。気色もや著かるらんとせば、いとど沈みまさり給ふを、今はとかく言ひ慰めつつ、「いつとなくかくても、いかがおはしますべきなれば、三条へも長月になれば急ぎおはしますべし。世の常にもてなしおはしませ。この月、三条へ

渡し奉りて、御経なども、御心静かに書かせ奉らん、とく具し参らせん。これにては、いかでかおはしますべき」とて、うち嘆けば、とかくものたまはで、引き被きて泣き給ふも、ことわりなり。げにもと思すにや、時々、起きゐなどし給ふ。

C 北の方はおはしまして、「いかにかくてはおはしますやらん。母君の御ことはことわりながら、それしかるべき世の習ひにてこそ侍れ。今はと思し慰みて、晴れ晴れしく思しなせ。東宮よりもあまりに心もとながらせ給へば、大臣は秋のころなんと思ひ

定め給ふに、かくのみおはしますこそ、心苦しけれ」とのたまへば、「ことわりと申しながら、片時立ち去らせ給はでおはしし御心ならひに、例なく思し嘆きて、今までもかく沈ませ給へるも、まことに心苦し」とて、うち泣く。①「久しく御墓なども、拝ま

せ給はぬことを、思し嘆くに、ふるさとへ具し奉りて、少し御心も慰め奉らん」と申せば、北の方、「御思ひ、ひとつにおはしますべきかは。御心地も苦しげにおはしますは、いかなる御ことにか。いかがは目放し奉らん。さりながら、大臣にかくとこそ申し侍らめ」とて、御物語し給ふ。姫君も念じて起き上がり給ひつつおはします御ありさま、まことにいつくしげに、らうたく

見え給へば、あはれにて、涙さへ落ちぬ。¹

さて帰り給ひて、大臣に、「宰相の乳母こそ、かうかうわびつるを」と語り給へば、「目放ち聞こえんはおぼつかなけれども、²さ思ひ給はんを、いかでか違へ聞こゆべき。おはしてやがて帰り給へかし」とて、ふるさとへ渡し奉り給ふ。

〔『あきざり』による〕

(注)

宰相の乳母、少将——姫君に仕える親子。

大殿——左大臣。

御帯——妊婦の腹に巻く帯。

東宮よりは——姫君が入内する予定の東宮からは。

問一 二重傍線部ア「思すにや」・イ「見え給へば」を例にならって文法的に説明せよ。

〔例〕「言ひけり」

言ひ(八行四段活用動詞「言ふ」連用形)・けり(過去の助動詞「けり」終止形)

問二 二重傍線部①「うち泣く」・②「思ひ給はん」の動作主をそれぞれ本文より抜き出せ。

問三 傍線部A「この御ことは霜月に当たらせ給ひたり」とはどういうことか、説明せよ。

問四 傍線部B「世の常にもてなしおはしませ」とあるが、何のためにそのように言うのか、説明せよ。

問五 傍線部C「いかにかくてはおはしますやらん」について、指示語の内容を明らかにしながら、現代語訳せよ。

問六 傍線部D「ふるさとへ具し奉りて」について、宰相の乳母がこのように訴えたのはなぜか。六十字以内で説明せよ。

第三問は次ページ

第三問

次の文章は、江戸時代に日本人が書いた儒学者や文人の逸話集『先哲叢談』からの引用である。これを読んで、後の問いに答えよ。（設問の関係で、返り点・送りがなを省いたところがある。）

嘗^テ夜^ニ行^ス郊^ニ外^ニ。劫賊四五人当^{タリテ}路^ニ立^チ、各^々按^{ジテ}劍^ヲ曰^{ハク}、「吾徒不^レ醉不^レ

樂^{シマ}。今無^シ酒資^ニ。客若^{モシ}欠^{カバ}腰纏^{ようてんヲ}、則^チ自^ラ脱^{ギテ}衣^ヲ裳^ヲ供^{セヨト}之^ヲ。」仁斎神色不^ニ

少^{シクモ}動^ゼ、曰^{ハク}、「今日適^{たま}無^シ橐^{たう}錢^{せん}。敝^{へい}縕^{うん}袍^{ぼう}脱^{ギテ}以^テ遺^{おく}之^ヲ耳。」^①且^フ問^フ、汝輩常^ガ

以^{ハク}何^ニ為^ス業^ヲ邪^ナ。曰^{ハク}、「昏夜横行、掠奪以^{シテ}自^ラ給^ス。是其業也。」仁斎曰^{ハク}、

「以^テ若^{かく}ノゴトク所^ヲ為^ス為^{サバ}業^ト、吾何拒^ゾ焉^{マント}。」輒^チ脱^ギ服^ヲ、以^テ授^ス之^ヲ、将^{シテ}去^ク。^②於是賊

止^{メテ}仁斎^ニ曰^{ハク}、「吾儕草窃^{ガともがらハ}為^シ衣^ス食^ス数^ス年、未^ダ嘗^テ見^テ举^キ止^ノ如^ク客^ノ者^ヲ。抑^{そも}客^ハ

何^い為^か者^{ナル}。」曰^{ハク}、「儒者也。」曰^{ハク}、「儒者為^ス何^ニ事^ヲ。」曰^{ハク}、「以^テ人^ニ道^ヲ教^{フル}人^ニ者也。」

^③所謂^{ナル}人^ハ道^ニ者^ハ孝^ニ於^ニ親^ニ、弟^ニ於^ニ弟^ニ、不^レ可^ニ一^ニ日無^ニ者^ニ是^ニ也。人^ニ而無^ク道^バ

禽獸ナル焉耳。ト言未畢ハ、賊皆頓首涕泣シテ曰、「噫、君ト与レ吾ヒト鈞シク是人也。」

而事業之廻ルニ異ハルコト。如④是。吾甚恥ダツ。願君宥ゆるセ吾ガ儕罪ノ。今ヨリシテ而後飲灰ミテ。

洗胃ヒ、謹奉ミテセント教于門下ヘ。遂皆改心ニ、自励ラ云ムト。

(原善『先哲叢談』より)

(注)

腰纏——身につけている金品。

橐錢——持ち合わせの金銭。「橐」は小さな袋。

敝縕袍——ぼろぼろの綿入れ。破れた上着。

草窃——おいはぎ。

事業——人としての営み。

飲灰洗胃——改心して善人になる喩え。

問一 傍線部①～④の読みを、送りがなの必要なものはそれも含めて、ひらがなで答えよ。

問二 傍線部A「常以何為業邪」を、ひらがなのみを用いて書き下し文に改め、現代語訳せよ。

問三 傍線部B「以授之、將去」を、ひらがなのみを用いて書き下し文に改めよ。

問四 傍線部C「不可一日無_二者是也」を現代語訳せよ。

問五 傍線部D「賊皆頓首涕泣曰」とあるが、「賊」が「涕泣」したのはなぜか。本文全体の内容を踏まえて具体的に説明せよ。

第四問は次ページ

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本の非営利活動の歴史を振り返って気づくことは、^Aのちに「NPO」と名付けられる存在の成立や変容は、そのまま社会の変容を映す鏡だということだ。社会が抱える課題、人びとの生活のニーズ、それらが満たされない状況を、時々のNPOは、実際の存在と活動を通して、その姿を変えながら示してきた。誰にとっても完璧で不満のない社会は考えにくいいため、NPO的な存在は、どの社会、どの時代にも存在し得る。その意味で、近代社会にとって普遍的なものだ。

一九五〇年代から七〇年代にかけては、日本の高度経済成長を背景に、企業活動や工場生産が活発になる反面、大きな公害問題が起きる。また、技術革新や大量生産が進むことで、新たな商品が増える一方、不当表示や薬害などの問題も表面化する。

当時の環境問題や消費者問題の背景には、利潤の最大化を目的とする企業活動が旺盛^{おちせい}だったことがある。こうした社会問題に対し、市民が自らの権利を守るべく住民運動が起こり、被害者や弱者救済に取り組む活動が生まれる。協同組合のように、働くこと、生産すること、消費すること、組織を所有することに、市民自ら参画しようとする動きも盛んになっていく。

一九七〇年代から八〇年代には、障害者や高齢者の福祉ニーズの高まりがある。社会保障は政府の重要な役割だが、当時は行政処分として措置され、利用者の選択ではなかった。これに対しては、自己決定権の確立を訴える運動が盛り上がり、あるいは、定められた画一的なメニューに対しては、多様な生活ニーズに根ざした住民参加の福祉サービスが始まる。教育についても、行き過ぎた管理教育や受験戦争などを背景に、就学支援やフリースクールなどの多様な学びの場が生まれた。視点を国外に向けると、難民問題をはじめ、一国の政府では対処しきれない問題に向き合おうとする市民の姿もあった。

これらの背景には、企業活動が基盤を置く市場経済の抱える困難や、民主主義であろうとも人びとの多様なニーズや権利を守りきれない政府の限界がある。いずれも、時代の新しい状況に適応していこうとするものの、それぞれの関心やコントロールの

及ばない出来事もさらに増えるため、誰かが引き受けなければならぬ課題は残る。

NPOの顕在化と必要性の高まりは、時代の移り変わりのなかで生じる、社会が対処しきれない課題の増加を示している。

たとえば、戦後、家族のかたちは、近代化により家父長制や直系家族などの大家族から核家族へと変わってきた。公私の領域の分離があり、情緒的な結合を重視し、子どもが中心となるような近代家族が誕生した。核家族化が進んでも、情緒的結合の機能は最低限維持されたと考えられていたが、単身世帯や非婚が増加し、それも期待できそうにない状況がある。

こうしたなかで、育児や介護、教育などのケアの機能を家族だけでは担えない「家族の失敗」という現実、これらの外部化や社会化を要請してきた。社会化は制度化や市場化を必要とするが、これらの限界もあり、多様化するニーズをすべて満たせるわけではない。ここに家族の変容から導かれるNPOの存在理由が生まれてくる。

このことを裏付けるように、今日のNPOの活動分野は「保健・医療・福祉」がもっとも多く、「子どもの健全育成」や「社会教育」とその隣接分野の割合も高い。具体的には、高齢者のデイケアや配食サービス、グループリビング、障害者の支援や社会参加の場合、子どもたちの居場所やオルタナティブスクールなど、この分野には、数多くの制度外の活動がある。こうした事実は、家族だけでは担えない社会的ニーズの存在を示している。

「地域社会」も同様だ。近代化以前の農業社会では、地域内の互助的な関係を必要としてきた。日本社会では、^{ゆい}結、^{こう}講などの互助機構が生まれ、近代以降にも近隣関係がその機能を継承してきた。言うまでもなく、現代社会ではその機能が喪失しつつある一方で、その必要性も、特に災害時に切実な形で露呈してきた。

地域社会が同質的なものから複雑な利害関係を含むものへと変容するなか、防災や防犯、環境などを含むまちづくり全体を包括的に行うことは、その画を描くことほど簡単ではない。ここに、個別の課題それぞれを共有する人たちが集まる契機も生まれる。「全員でやりましょう」は難しくとも、「やりたい人がまずやろう」という起^みこり方だ。「地域の失敗」とでも言うべき互助的な関係の喪失に対して、NPOの存在理由と役割を見出^{みいだ}せるのはこうした場合だろう。

二〇一九年末から数年に及んだコロナ禍では、ライフスタイルを見直す人びとが、これまで接点のなかった地域に積極的に参画しようとする動きも見られた。地域社会とは、おのずからあるものではなく、何らかの手立てで構想し醸成していくものとなっている。そのためには活動や組織が必要だ。

NPO法人の活動分野では、「まちづくり」が多く、防災や防犯などの「地域安全活動」、まちづくりともかわる「環境の保全」などもある。地域創生の現場にNPOは欠かせない存在であり、地域づくりや居場所づくりにはNPOの存在がある。「こども食堂」の取り組みは、^B家族のケアの社会化と近隣関係の喪失に対する現代的な対応の一つだろう。

「企業組織」の変容もまた、NPOの存在理由と無関係ではない。終身雇用や年功序列、企業別組合が特徴づけた日本の経営は、その共同体的特質を強く維持し続けた。冠婚葬祭を勤務先の「カイヤの同僚」が担う様子などはその象徴でもあった。

しかし、こうした特質は、低成長、長期不況、グローバルゼーション、ネオリベリズムの進行などを背景としつつ、非正規雇用の増加や雇用の流動化、ジョブ型採用、実績主義の増加とともに変容している。企業組織内の仲間関係も共同体的側面の機能を持っていたが、非正規雇用が四割を占める社会で、組織内でそれをどこまで期待できるだろうか。

コロナ禍では、エッセンシャルワークなどを除き、オンラインで可能な仕事も増えた。ただ、仕事そのものはリモートワークで可能でも、職場の仲間関係の重要性をあらためて実感したのではなかっただろうか。多くの人が思い知らされたのは、かつての「カイヤ」のような濃密な関係は忌避し^{ちゅうよう}つつも、つながり自体をすべて拒絶するわけでないような、中庸な関係の重要性である。

労働は生活を維持するため金銭を獲得する手段だが、同時に、個人と社会をつなぐ社会参加の場であり、社会的な包摂の場と言える。役割を担い、自己実現する場でもある。しかし、雇用環境の変化や企業組織の合理化の進行によって、こうした機能を維持することが難しくなっている。あるいは、非正規雇用の拡大に見られるように、もはやそれは一部の人だけが享受できる場かもしれない、ここから排除される多くの労働者がいる。

仮に、首尾よく定年まで勤めあげたとしても、人生一〇〇年時代と喧伝けんでんされるなかで、その後の長い人生をどう生きるかという問題が残る。これは、老後に社会とどうかかわっていかねばならない問題に他ならない。つまり、人生一〇〇年の半分以上が、会社での賃労働ではない期間のある時代に、この問題は誰にとっても他人事ひとことではない。

こうしたなか、かつて企業組織が担ってきた包摂的な機能を、どのように再び構築するか、他で代替するかが課題となる。趣味のサークル活動がそうかもしれないし、SNSを通じた交流は、社会とつながる重要なチャネルとなっている。そして、具体的な活動と人と接する場のあるNPOが、こうした機能の一部を代替する役割を果たすこともあるだろう。

たとえば、ボランティアやNPOへの参加理由として、その活動内容への関心と並んで、新しい関係、雰囲気、自己実現といった組織とのかかわり方に由来する項目があげられるのは、そのことを示している。自己実現としては、シニアの起業の向かう先がNPOになることもある。NPOの参加者が高齢層に偏ることに起因する運営上の課題はあるが、逆側から見れば、NPOは高齢者も若者も等しく参加できる貴重な社会組織なのである。

ここまで日本の社会変動のなかで浮かび上がるNPOの意味と役割を見てきた。こうしたNPOの役割に関する理論的な説明は、主に経済学的な観点から行われることが多い。NPOのテキストブックでは必ず取り上げられる項目だ。ここからは、理論的な理解に関心がある人に向けて、その説明を整理しておこう。

古典的なNPO理論に共通するのは、社会でNPOが供給している財・サービスの特性に注目し、それが政府や営利企業（市場）ではうまく対処できないという認識だ。

そもそもNPOは、何らかの程度で公共財的な性質を持つ財・サービスを供給している。公共財とは、対価を支払わない消費を排除できない性質（非排除性）と、同じ財について同時に複数の消費ができる性質（非競合性）を持つ財・サービスのことを指す。そして実際には、国防や警察などの純粋な公共財と、ケーキや車のような一般的な私的財との間に、部分的に公共財的な性質を持つ財・サービスがある。これらを「準公共財」といい、多くのNPOはこうした準公共財の供給主体として社会で役割を果たしている。

公共財の供給では、対価を負担せず便益のみ得るフリーライダーを排除できないため、企業が手を出しづらい。この場合、需要があっても供給が過小となり、資源の効率的な配分ができないことが知られる。市場が得意とする需給調整の機能がうまく働かないという意味で「市場の失敗」と言う。市場の失敗は、公共財の供給以外にも、情報の非対称性や副次的な影響が市場を経ずに第三者に及んでしまう外部性などでも生じる。公害につながる汚染や不法廃棄といった環境問題は、市場の失敗の典型例だ。他にも、不況や恐慌など経済安定機能がうまく働かなくなることや、格差や貧困などの極端に不公正な配分は、市場のみに任せることの限界の表れで、関連するさまざまな社会問題にもつながり得る。

こうした場合は、政府が介入すればよいという考えが成り立つ。政府が規制などでコントロールするのも市場の失敗が考えられる場合だ。このように、端的に言えば、私的財は市場による供給が効率的だが、公共財は政府が担う方がより馴染む^{なじ}と考えられてきた。

準公共財についても理屈は同じだが、財・サービスによつては私的財に近いものや公共財に近いものもあり、どこまで市場が行うのか、どこまで政府が介入するのかが一意に決めることが難しく、それはしばしば政治的な意思決定による。たとえば、社会保障サービスの供給のあり方を見ると、国ごとに政府の関与が大きく異なる。

もちろん、その政府も万能ではない。NPOが存在する理由はこうした政府の限界に由来すると考えられる。次にこれについて見ておこう。

NPOの理論の最初期かつ基本的なものとして、公共財供給の望ましい主体として考えられる政府の限界についての議論がある。公共財供給の理論などと呼ばれる「政府の失敗」アプローチがそれだ。経済学者のバートン・ワイズブロッドは一九七五年の論文で、NPOがなぜ存在するのかについて述べた。

準公共財であろうと、人びとの需要は多様であり、集団ごとに質・量で異なる社会的ニーズがある。たとえば、教育では、子どもの置かれた状況も親の希望もさまざまだろう。保健医療でもまちづくりでも、やはりその便益は社会全体にかかわる点で公共財的だが、世代や職業や収入などの属性やライフスタイル、価値観などを背景に、そのニーズもそれぞれだ。

政府が準公共財の供給をどのように行うかは、その意思決定を行う政治家の行動原理の影響もある。現職政治家は、再選の可能性を最大化するために、なるべく多くの人に受け入れられる選択をする傾向がある。この場合、有権者の中位にあたる人のニーズに応えることが重要となるので、そこに含まれない人のニーズは満たされないままだ。

何らかの難しい疾患しづかんを持つ当事者は手厚い公的支援を望むが、自分や家族に関係がない人はそれに賛成しないかもしれない。政治家は後者の存在を無視するわけにはいかない。こうした状況下では、より高いニーズや異なるニーズを持つ人は代替的な手段を探す必要がある。あるいは、声をあげ、社会的な関心を高めることから始めなくてはならない。

このギャップを埋める存在がNPOの原初形態だと考えられる。仮に国や自治体によりその水準が異なるからと言って、望ましい場所に容易に引越してできるものでもない。不登校の子どものため、学校とは別に開設されるフリースクール、特殊な疾病を抱える患者やその家族の情報交換や支援を行うグループなど、NPOがこうした活動に多いのも以上のように理解できる。

この説明では、準公共財に対する多様なニーズを背景に、政府に代わってその満たされない部分を埋める存在として、あるいは、多様なニーズに対応できない政府の裏返しとしてNPOの存在理由が導かれる。医療福祉や教育、子育てなどを想定すればわかるように、多くの場合それが生活を営むうえで必要なものである一方で、すべての人が同量・同質のサービスを求めているわけではなく、そのニーズはさまざまな属性やライフスタイルにより異なる。これらすべてのニーズを満たすことは、財政的およびその意思決定をする政治家の行動原理から難しく、それは多様性が高まるほどに顕著になっていくだろう。

一方で社会課題とニーズの多様化があり、他方でそれに応える公共財政が厳しくなるトレンドは、必然的にNPOのような存在を生み出すことにつながる。

このことを踏まえると、異質性の高い社会の方が、同質的な社会よりもNPOが多く存在することが類推できる。たとえば、アメリカには非常に多くのNPOが存在するが、その背景には人種や宗教、政治的など多様性の高さがあるからだと考えられる。

(宮垣元『NPOとは何か』による)

問一 傍線部A「のちに「NPO」と名付けられる存在の成立や変容は、そのまま社会の変容を映す鏡だ」とあるが、ここでいう「社会の変容」とは、どういうことか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問二 傍線部B「家族のケアの社会化と近隣関係の喪失」とあるが、これはどういうことか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問三 傍線部C「かつて企業組織が担ってきた包摂的な機能」とは具体的にはどのような機能か。本文に即して百字以内で説明せよ。

問四 傍線部D「異質性の高い社会の方が、同質的な社会よりもNPOが多く存在することが類推できる」のはなぜか。本文に即して百字以内で説明せよ。